

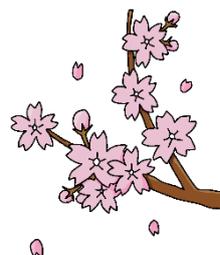
## 新しいスタートは、誰にでもある

いよいよ、明日から春休みです。1年間は どうでしたか？充実したものでしたか？いろいろな活動や行事を通して、みなさんの成長を感じることができたことをとてもうれしく思います。私は授業の中で、成長するためにはある種のストレスが必要であるという話をたまにしました。同じ話ですが、最後にもう一度、したいと思います。

課題であるストレスは、「今の自分を変えたい」という自分の希望であり、希望を叶えるための努力が継続的であること、内容・方法が的確であることが大切です。この春休みには、次のステップの自分になるために、どんなストレスを自分の耐性にできるか？ぜひチャレンジしてください。

最後にこの1年を振り返って…私は、「縁」というものをすごく大切だと思っています。「偶然」の出会いが「必然」の出会いとなるような濃密な1年間が過ごせたのも、生徒の皆さんのおかげです。また、保護者の皆様には、行事を含め、いろいろな部分でご理解・ご支援いただいたことに感謝を言伝えたいです。本当にありがとうございました。あっという間の1年間でしたが、それだけ、充実した時間を過ごせたと実感しています。さて、次のステージが目の前です。

4月8日、みんなの元気な笑顔と春休みの楽しいお話を待っています。



### —F1開幕と佐藤琢磨の挑戦—

3月6日、世界最高峰の自動車レース Formula One (F1) の新しいシーズンが始まりました。日本グランプリは、三重県の鈴鹿サーキット (Suzuka Circuit) で開催され、3月29日に決勝レースが行われます。シリーズ第3戦として行われるこのレースは、アジア・パシフィック・レグの締めくくりでもあり、世界中の注目が集まります。F1は、最先端の技術で作られたマシンと、世界トップレベルのドライバーが競い合うモータースポーツの頂点です。時速300キロを超えるスピードの中で、ほんの一瞬の判断が勝敗を分けます。今年は特に注目の年です。マシンのルールが大きく変わり、エンジンや空力など多くの技術が新しくなりました。まさにF1が「新しい時代」に入るシーズンです。これまでの強豪がそのまま勝ち続けるのか。それとも新しい才能が一気に頂点へ駆け上がるのか。そんなドラマが、これから世界中のサーキットで始まります。そして舞台となる鈴鹿サーキットは、世界中のドライバーから「ドライバーズサーキット」と呼ばれる特別なコースです。本当に運転がうまいドライバーだけが速く走れるコースだと言われています。そんなF1の世界には、これまで多くの日本人ドライバーが挑戦してきました。その中でも強烈な足跡を残した一人が佐藤琢磨 (さとうたくま) です。彼はこう残しています。「遅すぎる、などということはない」と…「モータースポーツで超一流になるには、3歳・4歳から血のにじむような努力をしなければ無理と言われています。でも僕は“どうして?”と思う。挑戦するのに、遅すぎるなんてことはないでしょう。」佐藤琢磨選手はこう語ります。実は彼は、子どものころからレーサーを目指していたわけではありません。早稲田大学2年生までは、全国大会でも優勝するほどの自転車競技の選手でした。転機は19歳。年齢制限ぎりぎりでもレーシングスクールを受験し、一発で合格。そこからモータースポーツの世界に飛び込みます。周囲は言いました。「19歳からレースなんて遅すぎる。」多くのF1ドライバーは幼いころからカートに乗り、何年もかけて経験を積んでいくか

らです。しかし、佐藤選手は気にしませんでした。1997年、レーシングスクールでスカラシップ（奨学金）を獲得。翌1998年には、ドライバー歴わずか2年で全日本F3に参戦します。彼には明確な目標がありました。「25歳までにF1ドライバーになる。」

その目標のためにイギリスへ渡り、言葉や文化を学びながら準備を重ねます。チームと細かなコミュニケーションを取るためには、言葉の力が必要だったからです。そして2000年、英国F3に参戦。伝説のドライバー、アイルトン・セナ（Ayrton Senna）に並ぶ年間12勝という記録を達成します。

そして2001年、ついにF1ドライバーになります。自転車競技からレースの世界へ。わずか5年で、世界最高峰の舞台にたどり着いたのです。佐藤選手はこう振り返っています。「**やろうと思ったら遅すぎるなんてことはない。トップに立つために飛び出すのは、だれもが苦しい峠の登りなんですよ。**」多くのドライバーが何年もかけて登る山を、彼はわずか5年で登りました。そして、自転車競技で彼が得意としていたのは、苦しい峠を越えたあとの下りで差を広げることでした。苦しい坂を登り切った先にこそ、本当の勝負がある。佐藤琢磨の挑戦は、そのことを教えてくれているのかもしれない。

### Never too late —遅すぎるなんてことはない—

さらに、綴

ります。「遅すぎる、などということはない」佐藤琢磨さんのこの言葉を聞いて、私はあるスポーツ選手のことを思い出しました。それは、田臥勇太（たぶせゆうた）選手です。日本人で初めてNBAのコートに立った選手です。世界最高峰のバスケットボールリーグ、NBAに、日本人として初めて出場した選手です。しかし、彼の道のりも決して平坦ではありませんでした。田臥選手の身長は173cm。バスケットボールの世界では決して大きい体格ではありません。それでも彼は、秋田の名門能代工業高校でプレーし、全国大会三冠（インターハイ・国体・ウインターカップ）を3年連続で達成するという偉業を成し遂げました。その後、日本でスター選手として活躍する道を選んでもおかしくありませんでしたが、田臥選手は、子どもの頃からの夢だったNBAへの挑戦を選びます。アメリカへ渡り、デンバー・ナゲッツと契約。ところが、開幕前にチームから解雇されてしまいます。夢の舞台まであと一歩のところで、道は閉ざされました。それでも彼はあきらめませんでした。下部リーグでプレーしながら、もう一度チャンスを待ち続けたのです。そして2004年、ついにフェニックス・サンズと契約。開幕ロースターに入り、日本人として初めてNBAの試合に出場しました。世界最高の舞台に立ったその瞬間、日本のバスケットボールの歴史が動きました。しかしNBAは甘くありません。その後、再びチームを離れることとなります。それでも田臥選手は前を向き続けました。挑戦したことを後悔したことは一度もないと言います。あるインタビューで、「NBA デビューが遅かったのでは？」と聞かれたとき、田臥選手はこう答えました。Never too late.「遅すぎるなんてことはない。」そしてもう一つ、彼にはこんな信念があります。「**融通無碍に貫き通す。やるのは自分。正解が何かは、自分で決める。**」周りがどう言うかではない。人と違う道でもいい。自分が選んだ道を、自分の力で進む。夢に挑戦するのに、遅すぎることはありません。失敗しても、また立ち上がればいい。大切なのは、挑戦をやめないことです。田臥勇太選手の人生は、そのことを私たちに教えてくれています。だから、もし今、「自分には無理かもしれない」「もう遅いかもしれない」そう思ったときは、この言葉を思い出してください。

Never too late.遅すぎるなんてことはない。

もうすぐ皆さんも、新しい学年を迎えます。新しい勉強、新しい目標、新しい挑戦が始まります。何かを始めるとき、「もう遅いかな」と思うことがあるのかもしれませんが、でも、佐藤琢磨選手の言葉を思い出してほしいのです。「挑戦するのに、遅すぎることはない。」世界のトップを目指すF1ドライバーも、同じように不安や迷いを抱えながらスタートラインに立っています。新しいシーズンが始まるF1のように、みなさんにもまた新しいスタートがあります。

「**融通無碍に貫き通す。やるのは自分。正解が何かは、自分で決める。**」の気持ちで、自分のスタートラインに、堂々と立ってください。

